

大田圏域連携型認知症疾患医療センター としての臨床的検討 (第1報)

おか だ かず のり おか だ ゆう すけ
岡 田 和 悟¹⁾ 岡 田 祐 介²⁾
なが おか あつ こ
長 岡 敦 子¹⁾

キーワード：認知症，臨床的検討，認知症疾患医療センター

要 旨

大田圏域認知症疾患医療センターとしての1.5年間の初期活動について，認知症外来初診患者149例（平均81.3歳）を対象として，その特徴と問題点を検討した。対象は，男女共80歳代が最も多く，女性が1.6倍の頻度で有意に高齢であった。受診経路は，かかりつけ医からの紹介が57.7%で，大田市と邑智郡との受診率の間に8~10倍の開きが見られた。主訴は，認知症の中核・行動・心理症状の3つに大別され，中核症状は物忘れが7割であり，段取障害や見当識障害，服薬・金銭管理・免許関連などが多かった。行動症状では暴力・暴言・興奮，不眠・不穏が，心理症状では，幻覚，意欲低下・うつ，妄想，易怒性が多かった。認知症としての比率は，アルツハイマー型認知症42%，レビー小体型認知症21%，血管性認知症14%が主な病型であった。急性・亜急性の発症では，器質的疾患や内科的疾患が原因の場合があり，救急疾患としての対応が必要である。

はじめに

我国の認知症高齢者の数は，2025年には約700万人，65歳以上の高齢者の約5人に1人に達すると推計されている¹⁾。この対策として，2015年「認知症施策推進総合戦略」(新オレンジプラン)²⁾

が策定され，全国的にその対策が進められている。認知症疾患医療センター（以下センター）は，新オレンジプランの中で，「認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護などの提供」の中に位置付けられ，その主な役割としては，判断が困難な例の鑑別診断と治療方針の決定，認知症についての最新情報の提供や助言，地域の保健・医療・介護等の関係機関との連携体制の構築等があげられている。センターは，その目的，圏域などにより，基幹型，地域型，連携型の3つの類型に分けられ，2019年5月現在，全国で449箇所が指定されてい

Kazunori OKADA et al.

1) 大田圏域連携型認知症疾患医療センター，
大田シルバークリニック

2) 島根大学医学部附属病院腫瘍・血液内科
連絡先：〒694-0064 大田市大田町大田イ47-5
大田シルバークリニック